

鵜沼一輪山古墳出土

三角縁波紋帯四神二獣鏡

発行 各務原市教育委員会文化課
〒504-8555 岐阜県各務原市那加桜町1-69
TEL (0583) 83-1111 (代)



市指定有形文化財「三角縁波文帯四神二獣鏡」

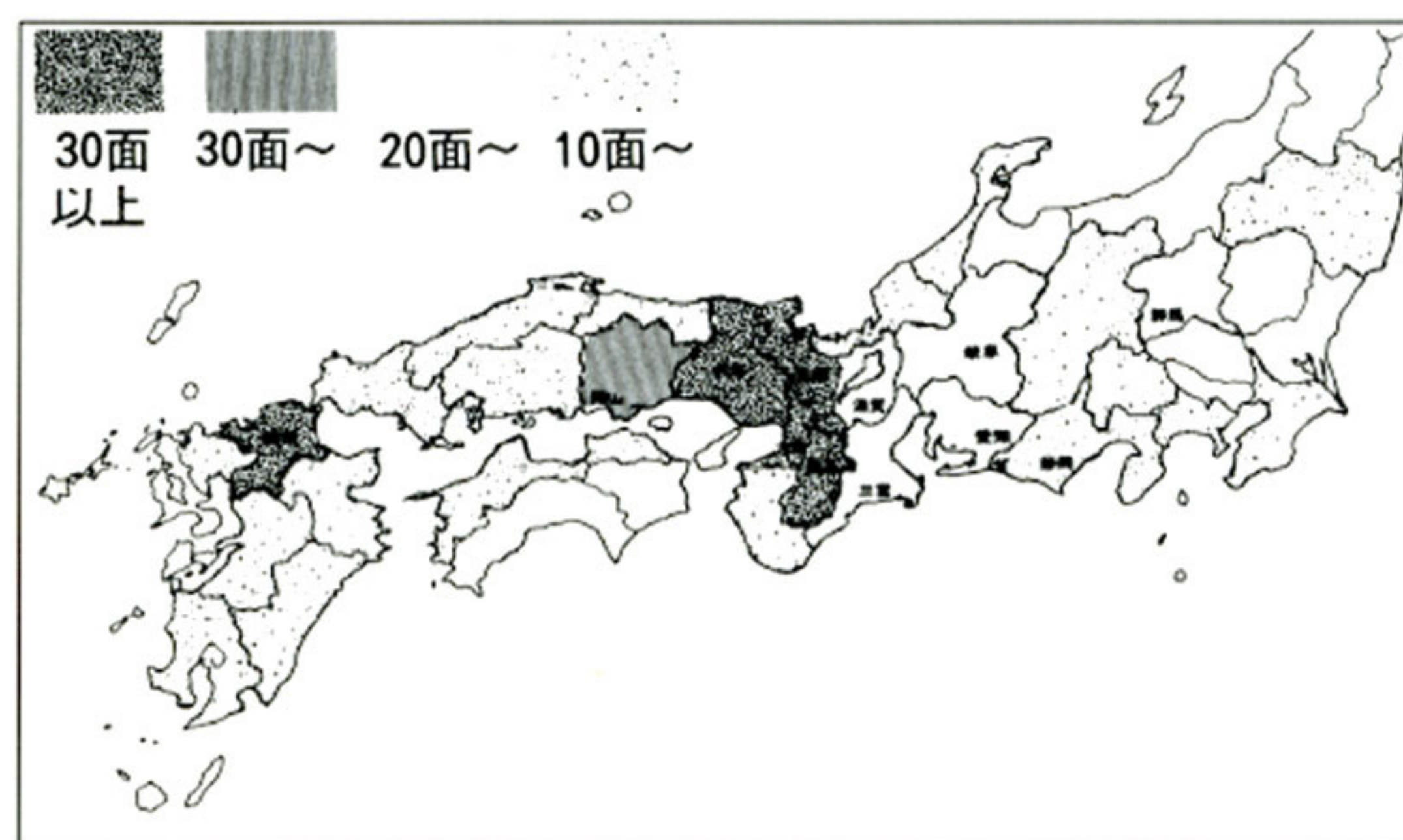
今から約1700年前の3世紀後半に中国で作られたとされる、いわゆる三角縁神獣鏡と呼ばれる鏡です。大きさは面径が21.8cm、縁の厚さ0.8cm、中央部の紐高が1.8cmです。

鏡の背面には様々な文様がみられます。鏡縁は断面が鋭い三角形となり、その内側には二重の鋸歯文帯の間に複線の波文帯を配した外区が、さらに、外区と鏡中央部の内区との間は波文をめぐらす文様帯となり、内区には4体の神像と2体の獣形が浮き彫りされています。こうした文様の配置から、この鏡の型式名を「三角縁波文帯四神二獣鏡」と呼んでいるのです。

鏡の神像および獣形は、中国の神仙思想に基づくもので、神像は東王父・西王母と呼ばれる不老不死の神か、あるいは琴の名手である伯牙やその音を聴く友人の鍾子期などの人物を表し、獣形は龍や虎を表していると思われますが、そうした区別が必ずしも明確とはいえません。なお、この鏡と同じ鋳型から製作された鏡が、島根県松江市新庄町八日山1号墳からも1面出土しています。

三角縁神獣鏡には、中国の景初三年(239)、正始元年(240)の年号を持つものがあり、さらに、歴史的には存在しませんが「景初四年」の銘を持つ鏡もみられます。景初・正始の年号は、後漢ののちに成立した魏・蜀・呉三国のうちの魏の年号です。

この時代は、日本では弥生時代の後期（3世紀）に相当し、邪馬台国の女王卑弥呼が魏国に使者を派遣して、活発な対外交渉を展開していました。魏の歴史書『三国志魏書』のなかに収められた「東夷伝」に、景初三年に邪馬台国の女王卑弥呼の使いが魏の都洛陽に入り、翌年の正始元年に様々な賜物をもらい帰国したという記事があります。その賜物のなかに、「銅鏡百枚」という記載がみられることから、製作年号の一致するこの三角縁神獣鏡こそが、卑弥呼がもらった鏡であると言われてきました。しかし、現在ではこの考えにも様々な反論があります。それは、この鏡が中国国内では一面も発見されていないことから、日本国内で作られたのではないかと考える説や、歴史に存在しない「景初四年」の年号を持つ鏡があることから、三角縁神獣鏡は魏で作られたものではなく、当時、魏の年号がかわったという情報が伝わらなかった他の国で作られたとする説などです。



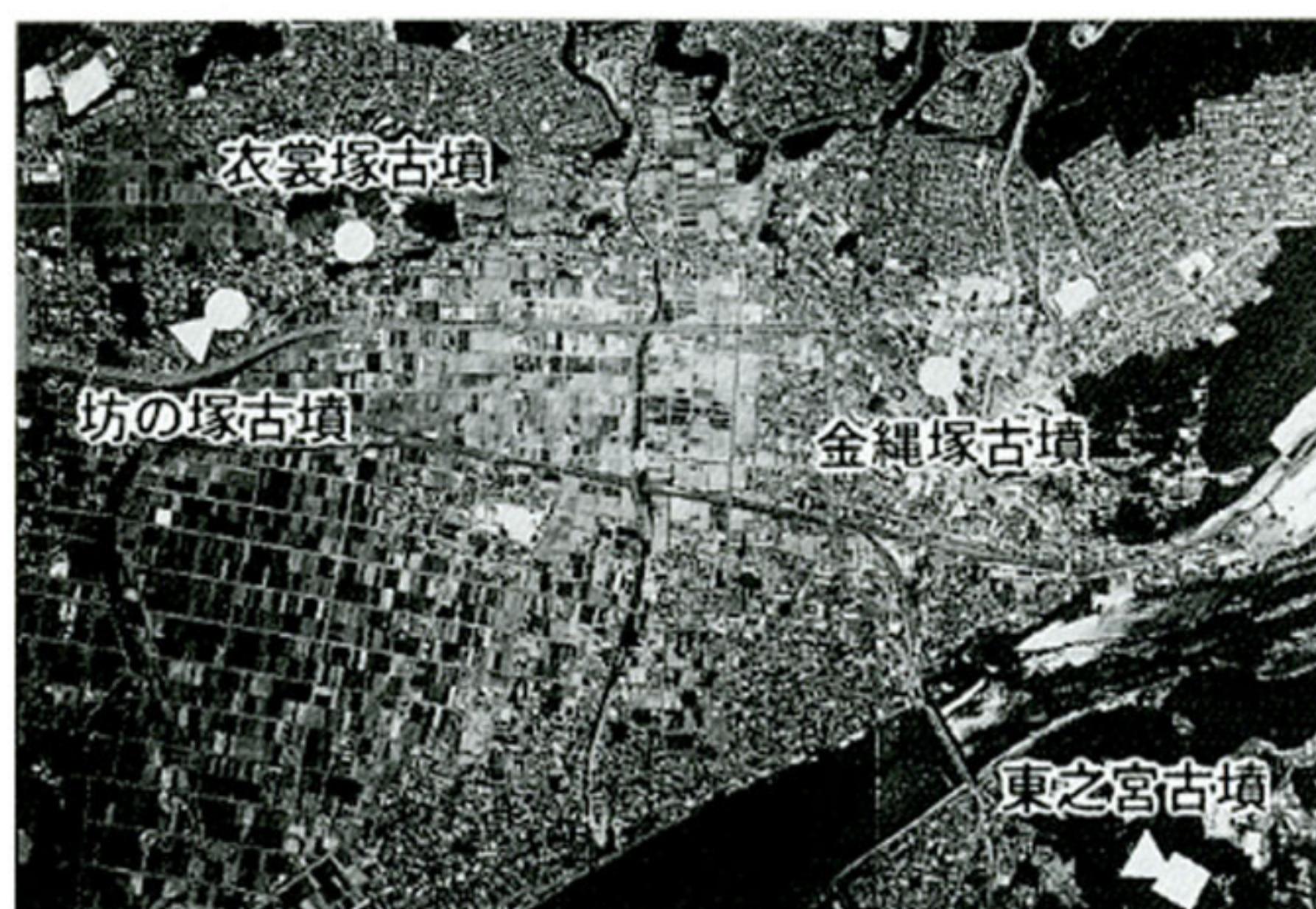
三角縁神獣鏡の分布図

三角縁神獣鏡は、全国で約300面発見されていますが、そのうち岐阜県からは破片も含めて17面が出土しています。この発見数は、当時の弥生文化の先進地域である、九州の福岡県、中国の岡山県・近畿の京都・奈良・大阪・兵庫の各府県に次ぐ数量であり、全国的にみれば、隣接する愛知県とともに分布の第三極をなしています。

岐阜県内での発見例は、大垣市・南濃町・岐阜市北部・可児市の各周辺に所在

する古墳と、この各務原市鵜沼地区の一輪山古墳からです。これらの地域はいずれも岐阜県的美濃地方における古墳文化の中心地域であり、発見された古墳は美濃でも最古の時期に属する古墳として知られています。

一輪山古墳は、鵜沼羽場町の衣裳塚古墳の東方約50mの所にありましたが、昭和の初期に開墾のためになりました。直径10m前後の円墳で4世紀後半代に築造され、各務原地域では最も古い古墳のひとつです。しかし、一輪山古墳がどのような埋葬施設だったのか、他にどのような副葬品があったのかなど詳しいことは明らかではありません。



鵜沼・犬山地区の前期古墳

各務原市の鵜沼地区には、一輪山古墳のほかに衣裳塚古墳（円墳・直径52m）坊の塚古墳（前方後円墳・全長120m）金縄塚古墳（円墳・直径38m）などの古墳時代前期に築かれた大型の古墳が所在しています。このことは、今から1600～1500年前の古墳時代前期の鵜沼地区に、大きな勢力を持つ豪族がいたことを表しています。

鵜沼地区は、木曽川をはさんで愛知県犬山市に對面し、木曽川をさかのぼれば美濃加茂・可児地域に至り、また、木曽川を下れば伊勢湾に通ずるというように、濃尾平野のなかでも地理的に重要な土地として知られています。

またそれは、対岸の犬山市に所在する「東之宮古墳」が、全長72mの前方後方墳で、愛知県に所在する古墳のなかでも初源期に属する古墳として知られていることからいえます。

東之宮古墳は、眼下に木曽川と濃尾平野を見渡す白山平山頂にあり、後方部の埋葬施設からは銅鏡11面のほか、鉄製武器・工具、玉類や石製腕飾類などが出土しました。

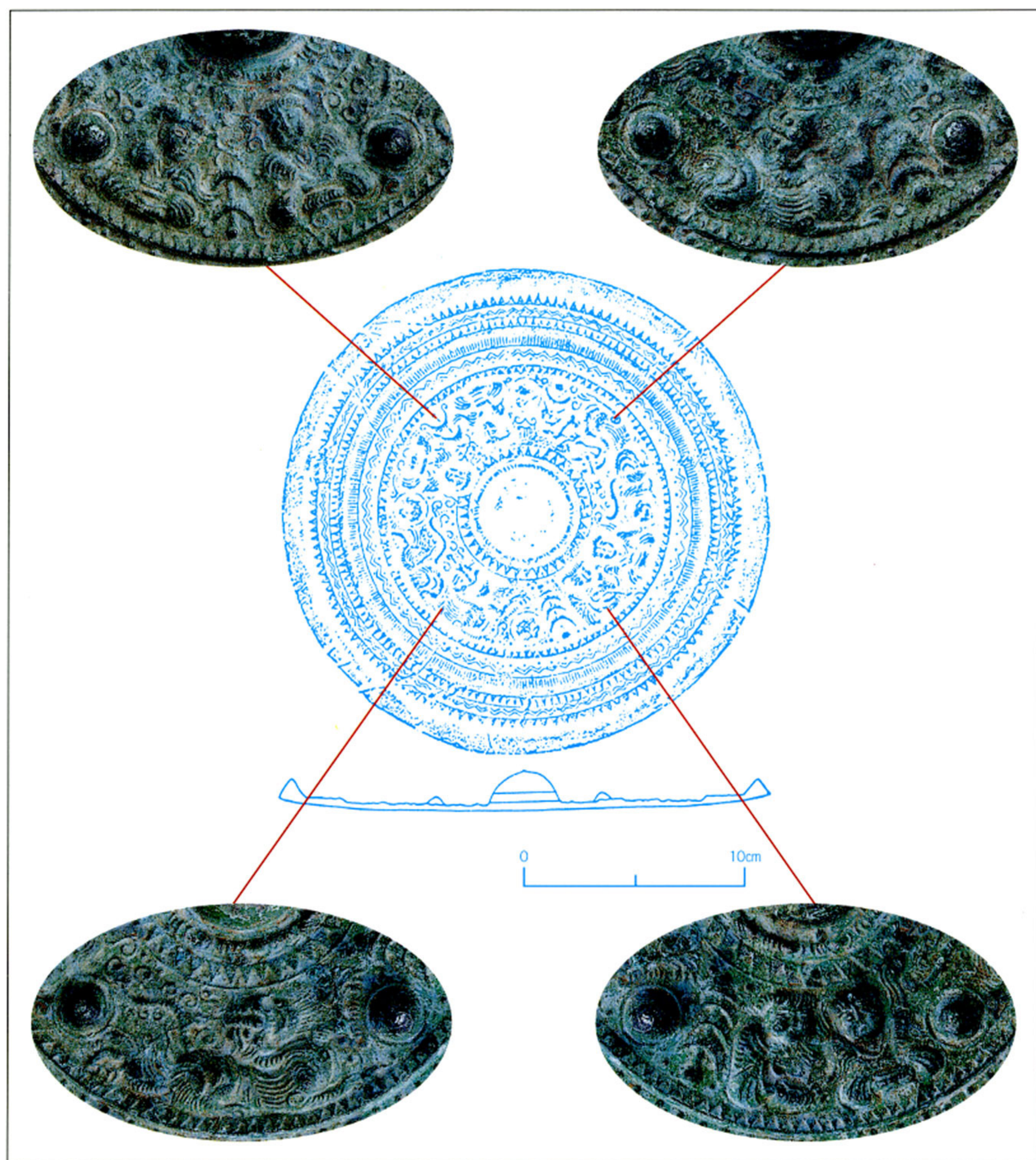


東之宮古墳遠景

銅鏡のなかには三角縁神獣鏡も含まれており、その墳丘規模や副葬品の内容などから、濃尾平野と美濃山地の北東境界部を治める大豪族の墳墓と考えられます。

東之宮古墳と一輪山古墳は、あいだに木曽川をはさんで南北兩岸に所在していますが、お互いの位置を視認することが可能な距離です。また、築造時期もほぼ同時期と考えられることから、両者の間には密接なつながりがあったと考えられます。

一輪山古墳の歴史的な性格は、幸いにも現在まで伝えられた一面の銅鏡からその重要性を証明することができました。それは、一輪山古墳が所在する鵜沼地区が、対岸の犬山地域とともに木曽川の渡河地点として、あるいは木曽川沿いに濃尾平野と東濃山地を行



「三角縁波文帯四神二獣鏡」の鏡背文様

き交う交通の拠点として、軍事・経済上の要地であったことの証明にほかなりません。

一輪山古墳と三角縁波文帯四神二獣鏡にみられる鵜沼地区の重要性は、こののち、4世紀末頃の衣裳塚古墳、5世紀前半代の坊の塚古墳、5世紀後半代の金縄塚古墳の築造と途絶えることなく継承され、日本の古代国家が形成される過程での畿内政治勢力と、尾張地方を本拠とする政治勢力や美濃の政治勢力の動向を考える上で、重要な意味を有しています。